

〈教育実践研究〉

生活援助論演習での経験型学習をととした学生の学びの分析

奥田玲子・深田美香・青戸春香・粟納由記子

The analysis of students' learning through experiential learning in exercises for the nursing care of daily living

OKUDA Reiko, FUKADA Mika, AOTO Haruka, AWANO Yukiko

キーワード：看護学生，生活援助技術演習，経験型学習，看護基礎教育

Key words: nursing students, exercises for the nursing care of daily living, experiential learning, foundational nursing education

はじめに

医療の高度化，患者の高齢化・重症化，在院日数の短縮化により看護業務が多様化・複雑化する中，臨床現場では安心して安全な医療がますます重視されるようになった。それに伴い，看護職には最善のケアを提供するために必要な知識や技術だけでなく，倫理観を踏まえた対応が求められている。看護基礎教育においては，看護に必要な知識や技術を習得することに加え，身についた知識に基づいて思考し，いかなる状況に対しても最善の看護が提供できる人材の基盤を育成する教育が必要不可欠となっている。

2013年，文部科学省は「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」で，Ⅰ群 ヒューマンケアの基本に関する実践能力，Ⅱ群 根拠に基づき看護を計画的に実践する能力，Ⅲ群 特定の健康課題に対応する実践能力，Ⅳ群 ケア環境とチーム体制整備に関する実践能力，Ⅴ群 専門職者として研鑽し続ける基本能力の5つの能力群とそれらの能力を構成する20のコアとなる看護実践能力を提言した¹⁾。これを受けて近年では，看護実践能力を看護技術の習得という一面だけではなく，看護実践に必要な倫理観や看護管理能力の保持，および専門職としての学習態度形成など，多面的な要素を含んだ総合能力としてとらえる考え方にシフトしてきた²⁾。各大学の学内演習においては，事例を使い，学生自らが感じ，考え，討議する方法を積極的に活用するなど，体験を重視した教育が行われるようになった。患者の模擬体験やロールプレイ，模擬患者参加型の演習は，患者理解の深まりや共感能力の高まり³⁾，患者を尊重する姿勢と行動，患者理解を基盤とした原則に基づくケアの実施⁴⁾，対象に合わせた技術提供のための思考力の強化⁵⁾など，経験をとおして発展的に学習が深められる教育方法として，その有用性が報告されている。

本学の生活援助論演習Ⅱでは，看護実践能力の育成に向けた教育方法として，平成27年度より事例を用いて学生がお互いに看護師役と患者役の模擬体験をする学内演習に取り組んでいる。模擬体験では，疑似的に状況を再現し，試行錯誤を繰り返しながら課題を考えることをとおして学習が深まることが期待される。そこで本稿では，生活援助論演習の課題レポートから学生の学びを明らかにしたので報告する。

生活援助論演習の概要

1. 科目の目的および授業展開

本科目は保健学科看護学専攻2年次前期に開講している。授業のねらいは，日常生活上の苦痛や不便さを解決するために対象者の状況に応じて援助の必要性を判断し，安全・安楽・自立の視点で実施する方法を身につけることにある。本科目では，未習得の清潔・衣生活の援助技術に焦点をあて，情報の解釈・分析，援助の必

要性の判断、援助方法の選択、実施上の留意点の検討、援助の実施、評価までの思考プロセスを段階的に学ぶことができるよう構成した(表1)。授業は演習を中心として進め、演習に必要な知識を確認するための小テストや演習での学びを整理する振り返りシートやレポート等を随時課した。

単元構成は「清潔の援助技術」「衣生活の援助技術」「統合技術演習」とした。技術の習得においては、まず演習項目の基本的な留意点について体験をととして理解し、次いで事例の状況に応じた援助方法の検討、援助の実施と評価を行なった。各演習項目の事例は、対象者の生活上の課題に対し個別性に応じた援助が見いだせるよう、看護技術に関する参考書⁶⁾をもとに学生がイメージしやすい状況を提示した(表2)。最終単元の「統合技術演習」では清潔と衣生活の援助技術が同時に必要となる事例を提示し、基本的ニーズのつながりを情報関連図に整理して対象者の理解を深め、援助の意図が明確になるようにした。

表1 生活援助論演習Ⅱの授業展開

講	単元	授業形態	学習内容
1・2	総論	講義	科目オリエンテーション 看護援助における基本的機能
3・4	清潔の 援助技術	講義	清潔の援助 清潔の援助の基本的知識 A 口腔内ケア 情報のアセスメントと援助方法の選択
5・6		演習	B 清拭 ① 情報のアセスメントと援助方法の選択・基本的な留意点
7・8		演習	B 清拭 ② 援助の実施と評価
9・10		演習	C 足浴 ① / D 洗髪 ① 情報のアセスメントと援助方法の選択・基本的な留意点
11・12		演習	C 足浴 ② 援助の実施と評価
13・14		演習	D 洗髪 ② 援助の実施と評価
15		講義	E 入浴介助
16		衣生活の 援助技術	講義
17・18	演習		F 寝衣交換 ① 情報のアセスメントと援助方法の選択・基本的な留意点
19・20	演習		F 寝衣交換 ② 援助の実施と評価
21・22	演習		F 寝衣交換 ③ 援助の実施と評価
23・24	統合技術 演習	演習	統合技術演習 ① 情報のアセスメントと援助方法の選択、実施計画
25・26		演習	統合技術演習 ② 計画にそって実施・評価
27・28		演習	統合技術演習 ③ 実施した援助の留意点を看護の基本的機能の視点から整理
29・30		発表/総括	統合技術演習 ④ グループ間共有・全体共有

表2 事例一覧

演習項目	事例
清潔の 援助技術	清拭 昨夜、発熱のため上半身に汗をかきました。「寝衣は着替えたいけど、身体がベタベタして気持ちが悪いので 上半身を拭いてほしい」と言っています。ベッド上安静です。座位は許可されています。 本日は体温36.6℃です。手足は自由に動かせます。
	足浴 入院して2週間入浴していません。毎日、身体は拭いてもらっていますが、足の汚れが着明で、「足が臭くて 気持ちが悪い」と言っています。ベッド上安静で座位は許可されていません。手足は自由に動かせます。
	洗髪 「1週間も髪を洗っていないので頭がかゆい。洗ってほしいけど、前に洗ってもらったとき寒気がして不快な思いをした」と言っています。ベッド上安静です。座位は許可されていますが、起き上がるとめまいがします。手足は自由に動かせます。
衣生活の 援助技術	寝衣交換① <対象者設定> 20歳代(男性or女性)階段から転落し左腰部を打撲しました。他は特に外傷はなく、意識は清明です。 ベッド上安静で座位は許可されていません。手足は自由に動かせます。 <状況設定> 寝衣の襟元に食べこぼしによる汚れがあります。「友人が来るので着替えさせてほしい」「裾が開けるのでズボンの寝巻きにしてほしい」と言っています。
	寝衣交換② <対象者設定> 70歳代(男性or女性)左上下肢に不全麻痺があります。座位は許可されており、昨日から端座位の訓練が 開始となりました。時々、尿失敗があるため防水シートが敷いてあります。 <状況設定> コップの水をこぼして寝衣が濡れました。「気持ちが悪いので着替えたい」と言っています。掛布団は足元にあつたので濡れませんでした。防水シートが少し濡れてしまいました。
統合技術演習	<対象者設定> 80歳代、(男性or女性)、歩いているときにつまづいて前方に倒れ、左手をついて受傷しました。左橈骨遠位端骨折で前腕～手関節にギブスをしています。下肢に骨折はありません。現在、受傷後1週間、骨折部の痛みはほとんどありません。左手指・肘・肩関節は動かしてよいです。 ベッドからの起き上がり、ベッドサイドへの移乗はゆっくり自力で可能です。歩行は足が少しふらつくため見守りが必要です。尿意をもよおすと間に合わないことがあるため防水シートが敷いてあります。ベッドサイドにはポータブルトイレが設置してありますが、間に合うときは車椅子でトイレまで行っています。 遠慮がちな性格で、右耳に軽度の難聴があります。認知機能障害はありません。利き手は右です。 <状況設定> バイタルサインを測定するために訪室すると、端座位でパンツを持っていました。 看護師が「どうしましたか?」と声をかけると、「しっこに行きたくなってトイレ(ポータブルトイレ)に座ったけど、着物の裾を引き上げるのが難しくてちょっと失敗した。着替えようと思って」と言っています。 下着、寝衣、防水シートが尿で汚れています。

看護援助における基本的機能には環境整備, コミュニケーション, ボディメカニクス, 倫理, 安全・安楽の理念的な項目が挙げられ, 援助技術の習得においては, 基本的機能を駆使しながら理論と実践を結びつけていくための体験的な学びと訓練が必要とされている⁷⁾。演習では, 援助の模擬体験を通して, 教科書に書いてある手順に終始することなく, 対象者の状況をどのように判断し, 安全で安楽な技術をどのようにしたら提供できるのかを考えながら行うことを重視した。

2. 演習方法

1 グループ10人~11人の8グループ編成とし, 演習は1グループを2つに分けて1ベッド5~6人で行った。提示された事例の情報をアセスメントし, 各自で対象者の個別性に応じた援助方法の実施計画を立案し, 計画に沿って実施計画の修正を行った。実施計画は看護援助における5つの基本的機能(環境整備, コミュニケーション, ボディメカニクス, 倫理, 安全・安楽)を念頭に置きながら, 実施前・中・後の留意点を考えるよう説明した。各ベッドで全員が看護者, 患者の役割を体験し, 一人実施が終わるごとに行為についての振り返りの時間を設け, メンバーからのフィードバックを受けながら改善につなげていくよう説明した。また, iPadやスマートフォンで動画を撮影し, 実施者が自分の援助の様子を客観的に振り返られるようにした。統合技術演習では, 最終回をグループ間とクラス全体で学びを共有する時間を設けた。

教員は常時5~6名配置し, 1人3~4グループを担当した。学生の体験からの気づきを大切に, 課題解決に向かえるよう適宜, 助言をしながらよりよい援助方法を見出していけるようにした。学生には演習項目ごとに振り返りシートを記載してもらい, 看護者としての自分自身の物事の見方や考え方について気づいたこと, 学習の取り組みに対する自己の課題を明確にして次の演習に臨むよう説明した。また, 単元ごとに看護援助の基本的機能についてレポートし, 学びをまとめてもらった。振り返りシートとレポートはコメントを加えて返却し, よかった点をクラス全体にフィードバックして前向きな姿勢を引き出すようにした。

対象と方法

1. 対象

2015年度に生活援助論演習Ⅱを履修した本学保健学科看護学専攻2年次生81名を対象とした。

2. データおよび分析方法

生活援助論演習Ⅱの最後に「統合技術演習での学び」, 「生活援助論演習Ⅱ全体を通じた成長の実感と今後の課題」についてレポートを課し, それぞれの記述内容を整理した。一つの文脈に複数の内容があった場合は内容を分割し, 意味内容を変えないよう要約後コード化した。コード化に際しては, 学生が記述している言葉ができる限り使うよう留意した。コードの意味内容の類似性に基づいて分類してサブカテゴリー名をつけ, さらに抽象度を上げてカテゴリー名をつけた。カテゴリー化と分析結果の妥当性は, 研究者間で協議し合意が得られるまで検討した。

3. 倫理的配慮

生活援助論演習Ⅱの成績評価が終了した後, 対象学生が全員履修する科目の講義終了後に協力の依頼をした。学生には目的, 方法, 倫理的配慮(協力は自由意思で成績に一切関係しないこと, 同意撤回をしても不利益は生じないこと, プライバシーの保護など)について口頭および書面にて説明し, 回収箱への同意書の回収により同意を得た。

結果

対象者81名に依頼し, 同意が得られた63名のレポートを分析した結果, 233のコードが抽出された。その

うち統合技術演習での模擬体験をととした学びに関するコード数は83で、19サブカテゴリー、6カテゴリーに分類され、1つのコアカテゴリーが創出された(表3)。生活援助論演習Ⅱ全体をととした成長の実感に関するコード数は118で、34サブカテゴリー、6カテゴリーに分類され、3つのコアカテゴリーが創出された(表4)。今後の課題に関するコード数は32で、8サブカテゴリー、3カテゴリーに分類され、1つのコアカテゴリーが創出された(表5)。

以下、コアカテゴリーは『 』、カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは< >, コードを「 」で示す。

表3 統合技術演習での学び

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	コード例	コード数
		既有知識を活用する	目に見える情報だけがすべての情報だと考えるのではなく、自分の持っている知識から予想できることも含めて対象者の情報だと考える	2
		意図的に情報を得る	アセスメントに必要な情報を能動的に得る	3
	個別性の理解	情報の関連性を考える	援助を考える際に、多方向から情報を整理する	2
		情報からニーズを読み取る	患者との会話や状況から情報を正確に読み取ることで、一人ひとりにあった援助ができる 患者とのかかわりの中で情報を整理し、患者が求めているものは何かを見極める	8
		生活全体を意識する	援助中だけでなく、連続する生活の一部として捉える	3
		よりよい方法を選択する	メリット・デメリットを考えてよりよい方法を選択する 状況に応じて、あらゆる可能性や様々な方法に気づき最善の援助を選択する	9
	個別性に応じる	患者個々に合わせて工夫する	援助は看護師や対象者の考え方や環境や病気の内容などにより変化する マニュアルとおりではなく、一人ひとりに合わせて援助を工夫する	7
		患者と共に考え話し合う	対象者の意見を取り入れ自立性を高める援助を行う 提案したり、コミュニケーションをとりながら対象者の意思を尊重して援助を行う	9
患者中心の看護援助		患者の立場で考える	患者の「今の気持ち」を考えた取り組みが「見えない訴え」を見つけたし、よりニーズに対応した援助につなげる 対象者の立場で考え、「そんなやり方は嫌だ」と思うことがないよう倫理に基づいた看護を行う	5
	気持ちに寄り添う	患者の意思を確認する	わかっている情報から勝手に決めつけず患者に確認して情報を確実にする 対象者の意思を確認し、対象者の心を一番大切に	6 6
		個人を尊重する	「援助されているから見られても仕方ない」ではなく、援助であってもその人の尊厳を守る	3
	安全確保	基本的知識を習得する	年齢や疾病による身体的変化などの基本的知識の習得により安全で効率な看護援助が実現できる	1
		潜んでいる危険を予測する	危険が生じる可能性を考えて広い視点で援助方法を考える	4
		予測される危険に対応する	患者の負担を減らし、危険を排除する	4
	環境調整	適切に物品を準備する	経済性や片付けのことを考えて、必要最小限の物品を最大限に活用する	3
		作業領域を確保する	作業領域を確保することでスムーズに援助が行える	1
		危険因子をなくす	効率性を考えるだけでなく、危険因子をなくすことに重点を置いて環境調整する	2
		人的環境を整える	プライバシーを考えた人的環境の調整をする	2
	ボディメカニクス	患者のボディメカニクス	対象者にもボディメカニクスを活用することで安楽な援助になる	3

合計コード数 83

表4 学生における成長の実感

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ	コード例	コード数	
自分の変化への 気づき	援助者としての 自分の変化	広い視野で捉える	考えながら行うことで見えていなかった危険や援助方法に気づき、視野が広がる 広い視野をもってさまざまな可能性を推測する	5	
		関連づけて考える	全体をみて関連づけて考える 複数の情報を関連付け、ニーズとのつながりを考えて計画する	4	
		個性に応じて 工夫する	情報をより深くアセスメントし、一人ひとりの個性にあった援助を考える 多面的な視点から援助の必要性を熟考し、工夫して、患者のニーズにあった援助を行う	4	
		行為の意味を考える	一つひとつの行為を関連づけて考え、目的をもって実施する 看護援助を細分化し、一つひとつの行為の意味を考える	6	
		患者の立場で考える	自分が患者だったら、と考えて行動する 思い込みからではなく、患者の立場で考え行動する	3	
		前向きに振り返る	実践、反省、計画を積み重ね、改善点を修正する	3	
		自分の傾向に気づく	自分の見える視野でしか物事を考えることができないと気づいた	1	
	学習者としての 自分の変化	多様な価値観を受け入れる	自分の固定観念から離れ、他者の価値観を受け入れる	1	
		自分なりの考えを持つ	教科書に載ってあることが正解というわけではなく、自分なりの考えをもつ	2	
		相手を思いやる	普段の生活から周りに目を向けて考える	3	
	グループダイナミクス による成果	相乗効果	職業意識が高まる	自分がどのような看護をしたいのかが少しわかった気がする 看護師となる者としての自覚が生まれた	6
			自発的な発言	自分の思ったこと、考えたことを口に出して言う 自分が意見を言うことで、話し合いが始まり、皆の学習につながる	5
			積極的な意見交換	自分一人で考えるのではなく、いろいろな人にアドバイスをもらう 模擬体験をとおして互いに意見を言うことで気づく	6
			意見の相違を解決する	食い違うことがあっても、話し合うことで納得する	2
知識を集結する			グループで一つのを仕上げる	2	
学習の進展		刺激し合う	いろいろな援助方法に刺激を受ける	2	
		他者を見て学ぶ	人のセンス、工夫を見て感じとる	2	
		解決策を模索する	違う意見を聞き、試行錯誤しながら皆で考える	3	
学習の進展		改善点を見つける	他者の意見を聞くことで内容が深まり、よりよい選択をする 他の人の意見を聞くことで、新たな気づきや改善点を見つける	4	
		広い視野を持つ	自分とは違う新たな考えを聞くことで視野が広がる チーム間でのフィードバックと共有で視野が広がる	5	
		新たな視点に気づく	新たな考えや視点を発見する 今まで考えが及ばなかった援助のコツや方法など新たな発見をする	4	
		見落としに気づく	チーム内で話し合うことで見落とししていたことに気づく	2	
看護援助についての 考えの深まり		看護援助の概念	異なる視点に気づく	他チームを見て「なるほど」と思う 他チームを見て「これすごいいいな」と思う	7
			技術の組み合わせ	援助は技術が組み合わさって構成されている	3
	看護援助の 実施上の要件	目的をもつ	何のための援助なのかその意図を明確にする	1	
		個性に応じる	患者一人ひとりに応じた援助を導き出す 情報から患者の個性を理解して、一人ひとりに合った援助を行う	7	
		推測の幅を広げる	患者と会話する一瞬の間に患者がどのような心情かを解釈し行動に移す	4	
		最良を選択する	情報をもとに何がベストなのかを考える 多くの選択肢の中から対象者にあった最良でかつ唯一の看護を選択する	6	
	看護援助の 実施上の要件	患者の自立を妨げない	患者に協力してもらう状況を築く	1	
		ボディメカニクスを発揮する	限られた空間でボディメカニクスを考える	1	
		段取りよく行う	準備をあらかじめしておく	1	
		安全・安楽を確保する	何気ない行動の中に危険があることを自覚する	3	
		患者の立場で考える	患者に聞いて確かめ、共に援助の方向性を探る 患者の立場に立って小さな心配りや配慮をすることが、最善の援助につながる	5	
		患者—看護師関係を築く	患者の気持ちをフィードバックすることで心の距離が縮まる	4	

合計コード数 118

表5 学生における今後の課題

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ	コード例	コード数
学び方を学ぶ	知識の活用	知識を多く仕入れる	知識がないで情報があるのに問題点に気づかないことが多いので、しっかり知識を習得する	3
		既有知識と統合する	習ったことが基盤になっていることに気づき、また勉強しないといけない 他の講義で学んだことと統合して理解を深め、実践に活かす	6
	思考力の強化	多面的に捉える	知識を活用して一つの情報からアセスメントの視野を広げる 一つのことに着目するだけでなく、多角的な視点から、同時に考えることができるような思考を身につける	8
		柔軟に思考する	自分の価値観だけに頼らず、患者や他の医療者とのコミュニケーションを大切にする パターン化された考えでなく柔軟に考える	5
	探究心	推論の幅を広げる	患者の全体像を捉えることに関して、原因を探り、可能性を考える あらゆるパターンから考え、応用して取り入れる	5
		体験から学びを発見する	体験の中から学びを発見することが向上心につながる	1
		自発的に学ぶ姿勢	学びをもっと深めたいという気持ちを大事にして、自発的に学びを発見し吸収する	1
		他者と意見を交わす	他者の考えの切り口も大切にして、あれこれ考える 他者との意見交換しながら、知識や技術に関心をもって積極的に吸収する	3

合計コード数 32

1. 統合技術演習での学び

統合技術演習での学びは 6 つのカテゴリに分類され、これらは『患者中心の看護援助』の中心概念に集約された。

1 つ目のカテゴリは【個別性の理解】で、＜既有知識を活用する＞＜意図的に情報を得る＞＜情報の関連性を考える＞＜情報からニーズを読み取る＞＜生活全体を意識する＞の 5 つのサブカテゴリで構成された。「自分の持っている知識から予想できることも含めて対象者の情報だと考える」、「アセスメントに必要な情報を能動的に得る」、「患者との会話や状況から情報を正確に読み取る」、「連続する生活の一部として捉える」など、必要な情報を意図的に収集し、既有知識を活用して情報の関連性を考えて対象者を生活の全体から捉えること、直接的なかかわりの中から患者が何を求めているかを見極めることが対象者の個別性の理解につながることを学んでいた。

2 つ目のカテゴリは【個別性に応じる】で、＜よりよい方法を選択する＞＜患者個々に合わせて工夫する＞＜患者と共に考え話し合う＞の 3 つのサブカテゴリで構成された。「マニュアルとおりではなく、一人ひとりに合わせて援助を工夫する」、「提案したり、コミュニケーションをとりながら対象者の意思を尊重して援助を行う」など、教科書とおりのやり方ではなく、患者の状態や状況に合わせてよりよい方法を見出すことの必要性を学んでいた。

3 つ目のカテゴリは【気持ちに寄り添う】で、＜患者の立場で考える＞＜患者の意思を確認する＞＜個人を尊重する＞の 3 つのサブカテゴリから構成された。「患者の“今の気持ち”を考えて取り組むことが“見えない訴え”を見出す」、「“そんなやり方は嫌だ”と思うことをしない」、「わかっている情報から勝手に決めつけない」など、患者のニーズに対応した倫理に基づく援助につなげるために、看護者の一方的な思い込みではなく、患者の言っていることや感情を理解することを学んでいた。

4 つ目のカテゴリは【安全確保】で、＜基本的知識を習得する＞＜潜んでいる危険を予測する＞＜予測される危険に対応する＞の 3 つのサブカテゴリから構成された。「基本的知識の習得により安全で効率的な看護援助

が実現できる」, 「危険が生じる可能性を考えて広い視点で援助方法を考える」, 「患者の負担を減らし, 危険を排除する」など, 安全な看護援助のために, 知識をもって行為によって起こりうる危険を予測し, 危険を回避するための手立てを講じていくことの必要性を学んでいた。

5つ目のカテゴリーは【環境調整】で, <適切に物品を準備する><作業領域を確保する><危険因子をなくす><人的環境を整える>の4つのサブカテゴリーから構成された。「経済性や片付けのことを考えて, 必要最小限の物品を最大限に活用する」, 「作業領域を確保することでスムーズに援助が行える」, 「危険因子をなくすことに重点を置いて環境調整する」, 「プライバシーを考えた人的環境の調整をする」など, 安全安楽な看護援助のためにケア環境を整えることの重要性を学んでいた。

最後のカテゴリーは【ボディメカニクス】で, <患者のボディメカニクス>のサブカテゴリーから構成され, 「対象者にもボディメカニクスを活用することで安楽な援助になる」など, 患者・看護師双方の安全と安楽を守るためにボディメカニクスを活用することの必要性を学んでいた。

2. 生活援助論演習Ⅱ全体をととした成長の実感と今後の課題

2.1 学生における成長の実感

演習全体をととした成長の実感は『自分の変化への気づき』, 『グループダイナミクスによる成果』, 『看護援助についての考えの深まり』の中心概念に集約された。

1つ目のコアカテゴリーは『自分の変化への気づき』で, 【援助者としての自分の変化】、【学習者としての自分の変化】の2つのカテゴリーに分類された。さらに【援助者としての自分の変化】は, <広い視野で捉える><関連づけて考える><個性に応じて工夫する><行為の意味を考える><患者の立場で考える>の5つのサブカテゴリーで構成された。「広い視野をもってさまざまな可能性を推測する」, 「看護援助を細分化し, 一つひとつの行為の意味を考える」, 「自分が患者だったら, と考えて行動する」など, 看護者として広い視野を持って深く考えられるようになってきた自分の思考の変化に気づくことで成長を実感していた。【学習者としての自分の変化】は, <前向きに振り返る><自分の傾向に気づく><多様な価値観を受け入れる><自分なりの考えを持つ><相手を思いやる><職業意識が高まる>の6つのサブカテゴリーから構成された。「実践, 反省, 計画を積み重ね, 改善点を修正する」, 「教科書に載ってあることが正解というわけではなく, 自分なりの考えをもつ」, 「普段の生活から周りに目を向けて考える」, 「自分がどのような看護をしたいのかが少しわかった気がする」など, 看護を学ぶ者としての積極的な学習の取り組みや職業意識の高まりを自覚することによって成長を実感していた。

2つ目のコアカテゴリーは『グループダイナミクスによる成果』で, 【相乗効果】、【学習の進展】の2つのカテゴリーに分類された。さらに【相乗効果】は, <自発的な発言><積極的な意見交換><意見の相違を解決する><知識を集結する><刺激し合う><他者を見て学ぶ>の6つのサブカテゴリーから構成された。「自分が意見を言うことで, 話し合いが始まり, 皆の学習につながる」, 「自分一人で考えるのではなく, いろいろな人にアドバイスをもらう」, 「食い違うことがあっても, 話し合うことで納得する」, 「グループで一つのものを仕上げる」など, 自分と他者との関係によって学習活動が活性化することで得られる納得感や達成感が成長の実感につながっていた。【学習の進展】は, <解決策を模索する><改善点を見つける><広い視野を持つ><新たな視点に気づく><見落としに気づく><異なる視点に気づく>の6つのサブカテゴリーから構成された。「違う意見を聞き, 試行錯誤しながら皆で考える」, 「他者の意見を聞くことで内容が深まり, よりよい選択をする」など, 他者との相互作用による思考の幅の広がりや深まりが自分一人で学習する以上に学ぶことへの充実感を高め成長の実感につながっていた。

3つ目のコアカテゴリーは『看護援助についての考えの深まり』で, 【看護援助の概念】、【看護援助の実施上

の要件】の2つのカテゴリーに分類された。さらに【看護援助の概念】は、＜技術の組み合わせ＞＜目的をもつ＞＜個別性に応じる＞＜推測の幅を広げる＞＜最良を選択する＞の5つのサブカテゴリーから構成された。「何のための援助なのかその意図を明確にする」、「情報から患者の個別性を理解して、一人ひとりに合った援助を行う」、「患者と会話する一瞬の間に患者がどのような心情かを解釈し行動に移す」、「情報をもとに何がベストなのかを考える」など、看護援助が専門知識に基づいた目的意識的な直接行為であり、患者個々の状況に応じて得られた情報を手がかりに、よりよいケアを提供することの重要性について理解を深めることができた。【看護援助の実施上の要件】は、＜患者の自立を妨げない＞＜ボディメカニクスを発揮する＞＜段取りよく行う＞＜安全・安楽を確保する＞＜患者の立場で考える＞＜患者—看護師関係を築く＞の6つのサブカテゴリーから構成された。「患者に協力してもらった状況を築く」、「限られた空間でボディメカニクスを考える」、「何気ない行動の中に危険があることを自覚する」、「患者の立場に立って小さな心配りや配慮をする」、「患者の気持ちをフィードバックすることで心の距離が縮まる」など、援助の際には安全・安楽・自立の視点をもって行うこと、立場を変換して患者の心理状態を推測して気遣い、患者・看護者の相互作用によって行為が援助として成り立つよう信頼関係を築くことの大切さを実感していた。

2.2 学生における今後の課題

演習全体をととした今後に向けての自己の課題は【知識の活用】、【思考力の強化】、【探求心】の3つのカテゴリーに分類され、これらは『学び方を学ぶ』という中心概念に集約された。

1つ目のカテゴリーは【知識の活用】で、＜知識を多く仕入れる＞＜既有知識と統合する＞の2つのサブカテゴリーから構成された。「知識がないので情報があるのに問題点に気づかないことが多いので、しっかり知識を習得する」、「他の講義で学んだことと統合して理解を深め、実践に活かす」など、患者理解を深め、課題の解決のために、新たな知識の習得とともに既有知識を使える知識として身につけることを課題として挙げていた。

2つ目のカテゴリーは【思考力の強化】で、＜多面的に捉える＞＜柔軟に思考する＞＜推論の幅を広げる＞の3つのサブカテゴリーから構成された。「一つのことに着目するだけでなく、多角的な視点から、同時に考えることができるような思考を身につける」、「パターン化された考えでなく柔軟に考える」、「患者の全体像を捉えることに関して、原因を探り、可能性を考える」など、固定観念を外して広い視野で物事を捉え、事象の要因や関係性について考える力を強化することを課題として挙げていた。

3つ目のカテゴリーは【探求心】で、＜体験から学びを発見する＞＜自発的に学ぶ姿勢＞＜他者と意見を交わす＞の3つのサブカテゴリーから構成された。「体験の中から学びを発見することが向上心につながる」、「自発的に学びを発見し吸収する」、「他者の考えの切り口も大切にして、あれこれ考える」など、より多くの学びを得るために、体験をととして自分なりの知恵を蓄えたり、他者と協働しながら課題に取り組み、意欲的に学ぶ姿勢をもつことを課題として挙げていた。

考察

統合技術演習での学びは、『患者中心の看護援助』を展開するうえで必要となる【個別性の理解】【個別性に応じる】【気持ちに寄り添う】【安全確保】【環境調整】【ボディメカニクス】についての内容であった。最終単元の統合技術演習では、本科目で学習した清潔と衣生活の援助技術が同時に必要となる事例を提示し、基本的ニーズのつながりを情報関連図として整理した。情報の関連性を考えながら全体から捉えることは、対象者が必要とする援助の意図を明確にし、個別性の理解を深めることにつながったと考える。また、清潔と衣生活の援助技術で学んだことを想起しながら課題に取り組めたことは、基本的留意点を考慮したうえで個別性に応じた援助方法を考えやすくした。古川⁸⁾は、取り組む課題がこれまで経験したことのある“反復的な課題”である場合、前向きな振り返り、課題達成にむけての進捗や進歩の自覚、解決の糸口や道筋の発見などによって課

題を継続するモチベーションが高まると述べている。本演習は全体をとおして、実施が終わるごとにメンバーからのフィードバックを受けながら行為についての振り返りを行なった。最終単元の統合技術演習では、それまでの経験から学んだ知識・技術を活用しながら、単に行為の良し悪しだけでなく、状況における判断の適切性を検討し、自らの気づきやメンバーからの意見や助言をもとに活発なディスカッションが行われた。メンバーからの建設的な意見により課題を解決するための糸口を見つけ出し、創意工夫しながら葛藤や困難を乗り越えていくことが、課題達成に向けて前に進んでいるという効力感をもたらし、根気強く課題に取り組むためのモチベーションを高めたと考える。また、最終回で行われたグループ間とクラス全体での学びの共有では、自分のグループ以外の他者の意見を聞くことでさらに新たな気づきを得ることができ、個性に応じた『患者中心の看護援助』について学びを深めたと考える。

演習全体をとおした学生における成長の実感は、『自分の変化への気づき』に関する【援助者としての自分の変化】【学習者としての自分の変化】、『グループダイナミクスによる成果』に関するグループ学習での【相乗効果】【学習の進展】、『看護援助についての考えの深まり』に関する【看護援助の概念】【看護援助の実施上の要件】についての内容であった。看護は個々の異なった人間を対象とするため、看護においては援助的人間関係形成を基盤に対象者の思い・考えや要望を把握して、その実現を含めたニーズの判断ができることが重要となる。本演習では、一つ一つの行為の意味を看護援助における基本的機能の5つの項目（環境整備、コミュニケーション、ボディメカニクス、倫理、安全・安楽）と関連づけて考えることを繰り返し行った。また、看護者としての自分自身の物事の感じ方や考え方について気づいたこと、学習の取り組みに対する自己の課題を明確にし、次の演習に活かすよう促した。真継ら⁹⁾は、学生が体験を価値あることとして意味づけること、さらに看護者としての視点をもって意味づけることは、人間として、看護者として成長していくプロセスにおいて重要な役割を果たすと述べている。振り返りの視点をもつことは、自分の考えを言語化することで行為の意味づけたり、自分の物事の感じ方や考え方を認識することで看護援助に対する考えを深め、看護者として成長していくためにどうあればよいかを自身に問いかける機会となったと推察される。また、コルトハーヘン¹⁰⁾は、仲間同士のフィードバックによる省察的な相互作用は、専門家としての意図された学びのプロセスを一層豊かにする（協働的省察）と述べている。さらに、グループ学習で他者と経験を共有することは、経験を構造化しやすくなると同時に、経験に対する他者の分析と自分自身の分析を比較することで、経験の捉え方を新しく発見できるとしている¹¹⁾。学生はグループ学習の中で他者の意見に耳を傾け、意見交換をとおして他者の価値観に触れ、自分の価値観を再認識することで、多面的な思考や自分とは異なる視点からの多くの気づきを得ることができたと推察される。看護者としての状況の見方の広がりや深まり、看護者になる者としての職業意識の高まりは、前向きな学習意欲を促進し、自己の成長を見出すことにつながると考える。

演習全体をとおした学生における今後の課題は、『学び方を学ぶ』ことに関する【知識の活用】【思考力の強化】【探求心】についての内容であった。経験型学習の演習をとおして学ぶことの意味は、五感を通して対象者とかがかわることにより、知を獲得していくことである。学びが成立するためには、視点をもって経験の振り返りを繰り返し行ない、課題に対しどのようにすればよいのかだけではなく、そうすることの意味について気づけるよう、グループ学習による協働的省察を支援する必要がある。古川¹²⁾は、コンピテンシーの学習は、単なる経験の有無ではなく、経験について意識的に継続的に振り返り、「経験をとおして学習する習慣」を持つことの必要性を示している。また、藤村¹³⁾は、振り返りの学習は“学ぶための方法”であり、それを体得すること自体が学びの対象となりうると述べている。看護者に必要な実践能力は、基礎教育修了後も実務での経験をとおして体得されていく。リフレクションは人が学習したり、個人的成長をするための中核的な役割を果たすとされていることから、看護基礎教育においては看護者として成長していくうえで基盤となる基本的な能力として、リフレクションの思考を身につけ経験から学び続ける方法を教授することが重要である。

おわりに

生活援助論演習Ⅱによる模擬体験をととして、学生は患者中心の看護援助を展開することの大切さや看護援助そのものについて考えを深めることができた。学生の学びが深まるかどうかは、課題を継続するモチベーションが大きくかわってくる。そのためには、視点をもって経験の振り返りを繰り返し行い、学生らが相互作用により多くの発見を得ることで学ぶことへの面白さや充実感が感じられるよう、主体的な学びを引き出す工夫が必要である。

奥田玲子（鳥取大学医学部保健学科基礎看護学講座）

深田美香（鳥取大学医学部保健学科基礎看護学講座）

青戸春香（鳥取大学医学部保健学科基礎看護学講座）

粟納由記子（鳥取大学医学部保健学科基礎看護学講座）

引用文献

- 1) 文部科学省. 「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」(資料). 閲覧日 2015. 11. 29
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/47/siryo/icsFiles/afielddfile/2011/11/04/1312488_5.pdf
- 2) 高瀬美由紀, 寺岡幸子, 宮腰由紀子, 川田綾子. 看護実践能力に関する概念分析：国外文献のレビューを通して. 日本看護研究学会誌. 34 巻 4 号, pp103-109, 2011.
- 3) 新田純子, 村田千代. ロールプレイを行った学生の学びの分析と今後の課題 ―他者理解, 援助的働きかけを促進する学びをねらいとして―. 弘前学院大学看護紀要. 6 巻, pp23-36, 2011.
- 4) 梶谷麻由子, 松本亥智江, 吉川洋子, 田原和美, 平井由佳: 模擬患者 (SP) 参加型看護技術演習における学生の学びと課題, 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要. 6 巻, pp57-68, 2011.
- 5) 竹内貴子, 中島佳緒里, 南田節子, 服部美德, 林 美希, 南 祐子: 看護実践能力を育てるための日常生活援助技術演習の展開. 日本赤十字豊田看護大学紀要. 9 巻 1 号, pp63-70, 2014.
- 6) 犬塚久美子. 看護技術 EXERCISE 場面を通して学ぶ看護技術演習. 看護の科学社. pp45-67, 2000.
- 7) 川口孝泰, 佐藤政枝, 小西美和子. 演習を通して伝えたい 看護援助の基礎のキソ. p4, 医学書院. 2013.
- 8) 古川久敬. 第 4 章 意識化することの促進効果 モチベーションと能力学習. 古川久敬, 池田浩, 柳澤さおり. 人的資源マネジメント-「意識化」による組織能力の向上. 白桃書房. pp72-76, 2010.
- 9) 真継和子, 池西悦子, 堀田佐知子, 近田敬子. 生活援助技術学習における教育的方法論の検討. 園田学園女子大学論文集. 42 号, pp129-144, 2008.
- 10) F. コルトハーヘン編著, 武田信子監訳, 今泉友里他訳. 教師教育学：理論と実践をつなぐリアスティック・アプローチ. 学文社. p152, 2010.
- 11) 前掲書 10) p152.
- 12) 古川久敬. 第 4 章 意識化することの促進効果 モチベーションと能力学習. 古川久敬, 池田浩, 柳澤さおり. 人的資源マネジメント-「意識化」による組織能力の向上. 白桃書房. p83, 2010.
- 13) 藤村まこと. 成功経験と失敗経験の振り返りが自信と努力量に及ぼす影響. 福岡女学院大学紀要 人間関係学部編. 15 号, pp81-87, 2014.